

SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」 ——『市民と語ろう！ ほっとミーティング』を中心に——

池村 明生^{*1}・隈本 純^{*2}・吉村 維元^{*3}・貴家 勝宏^{*4}

1. はじめに

教養学部の共通プログラムである SOHUM プログラムは、2017年度をもって9年目を迎えた。学部共通科目「現代文明論2」「人間学1」「人間学2」を関連させ、学外の組織や活動を活かしながら実践的な教育プログラムとして実施する SOHUM プログラムは、教養学部オリジナルの特徴的な取組みとして定着し、東海大学の中期目標となっていた「地域連携」や「国際連携」など、高等教育機関における学外連携の取組みの先行事例として実績を積み重ねてきた。

SOHUM プログラムは、教養学部を構成する3学科5課程の文理融合型の専門性を活かし、「自然」「環境」「社会」「地域」「国際」といったフィールドを積極的に取り込み、教員にとっては研究課題として、また学生にとっては教育課題として活用されてきた。結果、教養学部の教員たちは、目まぐるしく変化する昨今の高等教育機関の状況において、学内で様々な役割を担い、また学生たちはそれぞれの専門性を活かして社会貢献活動を実践しながら、また学外フィールドで活動する人々と接触して自らのシティズンシップを育ててきた。

このように9年目を迎えた SOHUM プログラムは、教養学部をアピールする特徴的な教育プログラム以上に、そこにかかわる教員・学生にとって、現代社会を生き抜く資質や感性を育てるプログラムでもあった。

2. 2017年度の取組み概要

2017年度の SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、例年に倣い秋学期開講科目の「人間学1」「人間学2」を中心に展開し、4名の複数教員体制で実施された。

「人間学1」では「地域ブランド創造」を授業テーマに、4名の教員がオムニバス形式の講義授業を担当した。1クールは「地域マーケティング」（隈本純准教授）、2クールは「地域ブ

受理日2018年11月28日

*1 教養学部芸術学科デザイン学課程教授 *2 教養学部人間環境学科社会環境課程准教授

*3 教養学部芸術学科美術学課程教授 *4 教養学部国際学科教授

ランド」(池村明生教授)、3クールは「地域戦略」(貴家勝宏教授)、4クールは「地域創造」(吉村維元教授)として、2年次生が中心となる履修生43名に「湘南」「地域」「ブランド」といった概念や日本各地で起こっているムーブメントを紹介し、調査やグループ討議を通じてアクティブラーニング型の授業を実践した。また最終回では同学期に「人間学2」で取り組んだ3年次生が活動報告を行い、「湘南地域ブランド創造プロジェクト」の実践的な取組みを具体的に伝えた。

「人間学2」では「湘南地域における地域ブランド創造プロジェクトの実践」を授業テーマに、芸術学科デザイン学課程および国際学科の履修生18名に対して、4名の教員が分担して学外の連携組織から提示された様々な課題に取り組んだ。主な取組みと連携組織・担当教員は、『市民と語ろう！ほっとミーティング』(平塚市市民情報・相談課／池村明生教授、貴家勝宏教授)、『ベジタマもなかプロジェクト』(平塚市農水産課／池村明生教授)、『みかんの木オーナーシップ事業サポート』(NPO 湘南スタイル／吉村維元教授)などである。それぞれスケジュールは異なるが、秋学期内での取組みとして終了した。

さらに本プロジェクトは、上述した学部共通科目以外にも個々教員が担当するゼミと連携を取りながら推進された。芸術学科デザイン学課程で開講する「ゼミナール1・2」(池村明生教授開講ゼミ)では、通年を通じて春学期から「湘南地域ブランド創造プロジェクト」にかかわる取り組みが進められ、履修する学生10名は継続かつ積極的にデザイン的な成果が求められる様々な活動を展開した。

また湘南地域をテーマに取り組む本プロジェクトは、学内外の地域連携事業と一体となることも多く、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)の採択事業であるTo-Collaboプログラムの大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 ブランド創造事業」や「ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業」、また東海大学・平塚市交流事業、平塚市の市民・大学交流事業などと連携して進められた。

3. 2017年度のプロジェクト実施内容

2017年度に行った本プロジェクトは、毎年恒例となったプロジェクトを含め、新たな取組みとともに様々なプロジェクトを推進した。中でも特筆すべきプロジェクトは『市民と語ろう！ほっとミーティング』(平塚市市民情報・相談課)であり、この詳細については別途項目を立てて記述するが、ここではそれ以外のプロジェクトについては以下に概要を述べる。

1) 平塚産農産物の地産地消費及活動

「ベジ太プロジェクト」

東海大学・平塚市交流事業の一環としてサポートした継続的なプロジェクトであり、平塚市農水産課が主体となる平塚産農産物の地産地消費を普及する活動を学生がサポートする取組みである。2017年度は春と秋に地元で開催した市民参加イベントにデザイン学課程の学生が出向き、子どもたちとふれあう活動を行い、またキャラクター“ベジ太”を活かした学内イベントの開

催や PR ツールのデザイン開発にあたった。

- ① ひらつか緑化まつり（2017年4月29・30日）
平塚市総合公園／参加学生5名
- ② JA でてこいまつり（2017年11月11・12日）
平塚市総合公園／参加学生5名
- ③ おひろめ芸術祭「ベジ太チョコレートアート」
（2017年10月21日）
東海大学湘南校舎13号館／参加学生10名
- ④ ベジ太 LINE スタンプ開発
（2017年9月～2018年3月）
学内作業（研究支援課と調整）／参加学生10名

2) 平塚市の漁業 PR 活動

「ひらつかタマ三郎プロジェクト」

平塚市の漁業 PR キャラクター“ひらつかタマ三郎”の活動をサポートする継続的なプロジェクトであり、2017年度は日本郵政グループが実施する「ご当地キャラに暑中見舞い・年賀状はがきを送ろう！」キャンペーンのはがきデザインを学生等が対応した。また学生は参加できなかったが、年度末において“ひらつかタマ三郎”グッズ開発をサポートした。

- ① ご当地キャラ暑中見舞いはがきのデザイン（2017年5月）
学内作業／参加学生1名
- ② ご当地キャラ年賀状はがきのデザイン（2017年11月）
TOKAI クロスクエア／地域連携課スタッフ
- ③ “ひらつかタマ三郎”グッズ開発（2017年2～3月）
TOKAI クロスクエア／地域連携課スタッフ

3) 小田原銀座通り商店会

「おだわらコワかわ提灯プロジェクト」

小田原駅前の銀座通り商店会の活性化を目的に、2012年度より継続して実施しているプロジェクトであり、2017年度は銀座通り商店街と隣接する緑一番商店街に範囲を拡大して、デザイン学課程の学生10名が2名1組となり、化粧品店・花屋・本屋・靴屋・写真スタジオの5店舗のオリジナル提灯を制作した。そして小田原提灯まつりの開催時期



図1 緑化まつりでサポートする学生



図2 ベジ太 LINE スタンプ



図3 開催した“ひらつかタマ三郎”グッズ



図4 小田原提灯教室で記念写真

に合わせ、過去6年間で制作したオリジナル提灯34体を店頭に飾り、スタンプラリーイベントが開催された。

- ① 提灯づくり体験&商店街視察（2017年5月13日）
小田原銀座通り&緑一番商店街／参加学生9名
- ② スタンプラリーイベント
（2017年7月22日～8月7日）
小田原銀座通り&緑一番商店街



図5 化粧品店の提灯を制作した学生たち

4) みかんの木オーナーシップ事業

「みかん狩りサポート」

茅ヶ崎市を中心に活動する市民団体NPO 湘南スタイルが取り組む「みかんの木オーナーシップ事業」のプログラムをサポートする活動であり、2017年度においても継続的に実施した。「人間学2」を履修した国際学科の学生9名と芸術学科美術学課程の吉村維元教授が二宮町のみかん農家に出向き、オーナーのみかん狩りをサポートしながらコンシェルジュ役を務めた。

- ① みかん狩りサポート（2017年11月25日）
二宮町一色／参加学生9名



図6 みかん箱を組み立てる学生たち

5) 第50回記念伊勢原観光道灌まつり

「ポスターデザイン」

2017年度も伊勢原観光道灌まつりのポスターデザインが実行委員会の事務局を務める伊勢原市商工観光課より依頼され、第50回記念ということもありデザイン学課程に在籍する8名の学生たちがデザイン案を提案した。その後、実行委員会において採用デザイン1点が決定し、採用された学生により印刷用の入稿データを作成した。ポスターは10月14・15日の開催に合わせ、小田急線全車両および県内の私鉄各駅に掲出された。

- ① 提案デザイン（2017年6月～7月）
参加学生8名
- ② 入稿用印刷データ制作（2017年8月～9月）
参加学生1名



図7 完成したポスターとデザインした学生



図8 車内で掲出されたポスター

6) ラスカ平塚「ギャラリー作品展示」

ラスカ平塚と東海大学の産学連携アートギャラリー「LUSCA HIRATSUKA & TOKAI UNIVARCITY ART GALLERY」において、2017年度も引き続きデザイン学課程および芸術学研究科の学生たちによる企画展を開催した。4月から9月まで開催した第7回「七夕とにぎわい」展では、デザイン学課程の4年次生8名が2016年度に取材した七夕の写真作品を発表。また10月から3月まで開催した第8回「タイの留学生が見たひらつか」展では、タイの留学生5名が湘南ひらつか七福神巡りを行い、神社仏閣で見つけたモノや風景をモチーフに写真作品を発表した。

- ① 第7回「七夕とにぎわい」展
(2017年4月～9月)
ラスカ平塚／参加学生8名
- ② 湘南ひらつか七福神巡り&取材
(2017年7月15日)
ラスカ平塚／参加学生5名(留学生)
- ③ 第8回「タイの留学生が見たひらつか」展
(2017年10月～2018年3月)
ラスカ平塚／参加学生5名(留学生)



図9 第7回「七夕とにぎわい」展



図10 第8回「タイの留学生が見たひらつか」展

7) 「犬&猫いのちをつなぐプロジェクト」

2017年度の新たな取組みとして、動物の収容や保護、また譲渡や愛護啓発事業を推進する神奈川県動物保護センターの協力のもと、デザイン学課程の10名の学生が参加し、譲渡対象となる犬や猫を紹介するイラストレーション展を開催した。展覧会開催にあたり事前にセンターを視察見学しながら、ペットがおかれている社会状況を学んだ。

- ① センター視察
(2017年5月9日)
神奈川県動物保護センター／参加学生10名
- ② 展覧会開催
(2017年6月19日～6月24日)
TOKAI クロスクエア／参加学生10名



図11 神奈川県動物保護センターの見学会



図12 TOKAI クロスクエアでの展覧会

8) 「みんなで願おう！ ラスカの七夕まつり」展

ラスカ平塚と学生との新たなコラボレーション企画として、デザイン学課程10名の学生たちが制作した七夕のイラストレーションを活用し、館内装飾および来館者参加型のイベントが開催された。会期間、館外や1階、5階には装飾バナーが演出され、5階の特設会場の短冊コーナーでは、学生たちのイラストレーションによる演出物が飾られた。

- ① ラスカの七夕まつり（2017年6月23日～7月9日）
ラスカ平塚／参加学生10名
- ② 会場視察（2017年6月28日）
ラスカ平塚／参加学生4名



図13 ラスカの七夕まつりを視察する学生

9) 平塚市の地産地消活動

「ベジタマもなかプロジェクト」

昨年度より本格的に始動した平塚市の農産物および海産物の地産地消をアピールする「ベジタマもなか」（ベジ太とタマ三郎が刻印されたもなか）を活用した取組みが、学生協力のもと積極的に行われた。取組みとしては農水産課を中心に、「学校給食への提供」「市内イベントでの販売」「市民対象のレシピコンテスト開催」が行われ、デザイン学課程の学生たちが中心となり、イベント販売会やレシピコンテストの審査会に立ち会いプロジェクトを盛り上げた。

- ① ベジタマもなかアイコンデザイン（2017年8～9月）
学内作業／参加学生10名
- ② レシピコンテスト1次審査（2017年11月7日）
平塚市役所（豊原分庁舎）／参加学生10名
- ③ 「ベジタマもなかフェア」サポート
（2017年11月19日）
ラスカ平塚／参加学生2名
- ④ レシピコンテスト最終審査（2017年12月17日）
神奈川県立花と緑のふれあいセンター
参加学生10名
- ⑤ ベジタマもなか販促ツール開発（2018年2～3月）



図14 もなかフェアをサポートする学生



図15 レシピコンテストの最終審査会



図16 開発したベジタマもなか販促ツール

以上が2017年度に行ったプロジェクトである。これらは継続的な取組みや今年度新規に立ち

上がった取組みで構成されるが、いずれも SOHUM プログラムの9年間の取組みにおいて発生した取組みであり、本プロジェクトに対する期待の成果である。

次に2017年度の特筆すべきとなった『市民と語ろう！ ほっとミーティング』（平塚市市民情報・相談課）についての詳細を報告する。

4. 『市民と語ろう！ ほっとミーティング』プロジェクト



図17 『市民と語ろう！ ほっとミーティング』のプレゼンテーションを終えて落合市長と記念撮影

1) プロジェクトの経緯と立ち上げ

『市民と語ろう！ ほっとミーティング』は、平塚市市民情報・相談課から東海大学地域連携センター地域連携課に依頼され、昨年度に引き続き計画された平塚市の落合克宏市長と東海大学の学生たちとの対話を目的とした取組みである。「学生たちの声を政治に反映させていきたい」との落合市長の思いを実現するため、2017年度は平塚市が積極的に進めるシティプロモーション計画の一環として、「湘南平の魅力アップを目的に来街人口を増やす」ことをテーマに学生たちが提言することになった。

地域連携課では昨年度と同様に、ゼミや授業を通じて取り組める教員を通じて学生参加を促し、結果、教養学部においてはSOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」の取組みとして、池村明生教授と貴家勝宏教授が担当となり、「人間学2」を履修するデザイン学課程および国際学科の学生18名が参加することになった。また現代教養センターの開講科

目である「プロジェクト実践D」も加わり、成川忠之教授と堀本麻由子准教授の履修学生も参加する複合型の授業形式で進められた。

授業スケジュールについては秋学期内で完結できるように、事前に参加教員の意見を集約しながら市民情報・相談課と地域連携課の職員が調整を行い、前半・中盤・後半に全学生が集まるコア日を設定してプログラムを用意し、それ以外はゼミまたは個々の授業内で提言内容を検討する進め方とした。よって必然的に提言を行うグループは、参加教員それぞれがまとめやすい学生グループの単位として、「湘南地域ブランド創造プロジェクト」では池村明生教授がまとめるデザイン学課程の学生10名と、貴家勝宏教授がまとめる国際学科の学生8名に分かれ、さらに成川忠之教授がまとめる「プロジェクト実践D」の履修生3名の3グループの成果発表をめざした。(堀本麻由子准教授がまとめる「プロジェクト実践D」の履修生は、他のプログラムの成果発表をめざしたため、本取組みにおいては前半のみの参加となった)

2) 実施プログラムの内容

本プロジェクトでは前半・中盤・後半に全学生が集まるコア日を設定して、4つのプログラムを推進した。前半は秋学期が始まった10月に平塚市市民情報・相談課が中心となり、学内において2つのプログラムを準備し、本プロジェクトに取り組む与件を学生にレクチャーしながら本課題に対する機運を高めてもらった。また中盤においては本課題に取り組む専門家の視野視点を学ぶことを目標に、学内において公開講座を企画して実施した。そして後半の最終プログラムでは学外に場所を移し、平塚市役所において提言内容を発表する機会とした。そして4つのプログラムはすべて火曜5限として開催し、他の授業に被ることなく全学生が参加できるように配慮した。以下が4つのプログラムの実施内容である。

プログラム① 「平塚市職員によるレクチャー」

日 時：2017年10月3日(火) 16:50~18:20

会 場：東海大学湘南校舎13号館207教室

参 加：平塚市職員(市民情報・相談課/秘書広報課/みどり公園課)

東海大学教職員・学生30名程度

概 要：本プロジェクトの導入にあたり、対象となる全学生に対して、平塚市が取り組む「シティプロモーション」および「湘南平の魅力アップ」について市職員の説明がなされた。

- 1) レクチャー①「平塚市のシティプロモーション」(秘書広報課)
- 2) レクチャー②「湘南平の魅力アップ」(みどり公園・水辺課)
- 3) 学生からの質疑応答



図18 平塚市職員によるレクチャー風景

プログラム② 「落合市長と学生たちの対話」

日 時：2017年10月17日（火）16：50～18：20

会 場：東海大学湘南校舎13号館207教室

参 加：平塚市落合市長、職員（市民情報・相談課／秘書広報課）

東海大学教職員・学生30名程度

概 要：本プロジェクト検討のきっかけづくりとして、落合市長に大学を訪問いただき、「平塚市の現状」を説明いただいた上で、「湘南平の魅力アップ」について学生たちの質問に答えるかたちで対話がなされた。

1) 市長説明「平塚市の現状」

2) 市長と学生との対話



図19 落合市長と学生たちの対話風景

プログラム③ 「広告代理店プランナーによる公開講座」

日 時：2017年11月14日（火）16：50～18：20

会 場：東海大学湘南校舎13号館201教室

講 演：中村賢昭（株式会社読売広告社 統合ソリューション局 プランナー）

参 加：東海大学教職員・学生20名程度

概 要：教養学部SOHUMプログラムの公開講座として、平塚市のシティプロモーション計画にかかわる専門家を招き、「地域創生とシティプロモーション」と題した講演を実施した。

1) シティプロモーション活性の背景と広告会社の役割

2) 読売広告社のシティプロモーションに対するアプローチと事例紹介

3) 平塚市のシティプロモーションの取組みについて



図20 公開講座風景

プログラム④ 「学生から落合市長への提言」

日 時：2018年1月16日（火）19：00～20：30

会 場：平塚市本庁舎

参 加：平塚市落合市長、職員（市民情報・相談課／他関係部署）

東海大学教職員・学生25名程度

概 要：本プロジェクトの最終プログラムとして平塚市役所に出向き、3つの学生グループにより「湘南平の魅力アップ」をテーマとする提言を、落合市長および関係部署の職員に対して行った。



図21 学生から落合市長への提言風景①

- 1) 「平塚市における外国人観光客向けの地域観光プロモーション」(国際学科学
生)
- 2) 「HIRATSUKA SHONAN HOLYLAND 計画」(デザイン学課程学生)
- 3) 「湘南平バラ園計画」(「プロジェクト実践 D」履修生)

3) 学生の提案内容

本プロジェクトではそれぞれの学生グループにより3つの提案を落合市長および関係部署の職員に対して行った。提案はともに学生たちが自由に考えた内容であるが、提言終了時に落合市長からは、「行政の枠の中で政策を考え進めると、どうしても予算や許認可などに頭がいきがちです。今日の提案は、どれも学生さんの柔軟な発想を生かしたもので、とても楽しく聞かせていただきました。1つでも2つでも取り入れながら、魅力ある政策を展開していきたい」とのコメントもあり、平塚市においても魅力的で刺激的な内容であったと思われる。

それぞれの提案内容については以下に概要を示す。

■提言① 「平塚市における外国人観光客向けの地域観光プロモーション」

提 案：東海大学教養学部国際学科 学生7名(指導：貴家勝宏教授)

概 要：将来的に訪日観光客数の増加が見込まれることから、平塚市へも波及できると考え、地域や市民団体と連携をとり、外国人旅行者へ向けた地域体験型観光を提案する。

施 策：1) DMO

地域体験型の観光を実現させる主体として、DMO(Destination Management Organization)という地域の稼ぐ力を引き出し、地域の誇りと愛着を醸成するため、観光地経営に基づく、戦略を立てる行動主体に着目した。

2) 留学生への質問

日本に観光目的で訪れるとき、何を求めるのか、東海大学に通う留学生に質問をした。すると、温泉や花見、テーマパーク、アニメやドラマの聖地を巡礼したいなどといった、「こと消費」を求めていることがわかった。

3) こと消費の平塚

外国人観光客に向け、「こと消費」の平塚をイメージさせたい。

(ア) 工芸品達磨づくり体験

(イ) 湘南イチゴ狩り体験

(ウ) 平塚の近海での漁業体験

4) こと消費の空間づくり

外国人観光客がこと消費を行うため、快適な滞在が実現できるよう、空間づくりを行う。ゲストハウスであれば、文化の紹介や案内の多言語化。飲食店であれば、写真やイラストを使った表記、宗教を考慮した料理の提供などを行う。

5) 資金調達

クラウドファンディング(不特定多数の人からのネットなどを活用した財源の提

供や協力) による資金調達で、平塚市の負担が軽減できる。学生、地域、観光客の交流を軸に置いた地域振興活動に興味を持った人や団体などに資金の協力を求める。実際に資金提供を行ってくれた人や団体へ「こと消費」を体験していただく。

まとめ：DMO をベースに地域を活かす観光「こと消費」を推進し、実現させるための環境づくり（事業者、漁師、直売店等への働きかけ）が必要です。実行のためには、資金収集が不可欠で、それにはクラウドファンディングによる調達を進めます。提携先として、平塚市観光協会や神奈川中央交通、市役所関係部署と連携しながら、「こと消費」を実行することで、平塚市の観光に寄与できると考えます。

■提言② 「HIRATSUKA SHONAN HOLYLAND 計画」

提 案：東海大学教養学部芸術学科デザイン学課程 学生10名（指導：池村明生教授）

内 容：平塚市に関わりながらも市外の人にとっても、魅力的なテーマをいくつか想定することで、たくさんの人に愛される「みんなの聖地」湘南平を目指すこととした。

施 策：平塚市の象徴的な場所である「湘南平」を聖地イベントのステージに見立て、平塚市をアピールする様々な資源をテーマとするプロモーションイベントを年間行事として恒例化させ、市内外の人が定期的に訪れたいくなる「みんなの聖地」を目指す。

1) 「薔薇」の聖地，湘南平

薔薇の産地をアピールするため、バラ足湯やバラスイーツを製作。

2) 「湘南ベルマーレ」の聖地，湘南平

ドリブル競争大会、OB 選手とのタイアップ企画による工芸品展示。

3) 「BBQ」の聖地，湘南平

頂上にバーベキュー広場を設置。フォトラリーで食材を提供。

4) 「だるま」の聖地，湘南平

期間限定のだるまを作成。オリジナルだるまのコンテストを開催。

5) 「麺愛好家」の聖地，湘南平

わんこ麺大会の開催。どんぶりの絵付け体験。麺レシビコンテスト。

6) 「スラムダンク」の聖地，湘南平

なりきりバスケット大会。漫画スタンプラリー。写真撮影ゾーン設置。

7) 「スキムボード」の聖地，湘南平

スキムボードの初心者講座，体験会。スイーツや氷菓子などの販売。

8) 「お野菜おばけ」の聖地，湘南平

頂上までの道にお野菜おばけのオブジェを設置。仮装コンテスト。

9) 「新鮮」の聖地，湘南平

特産物のグルメフェス。使用された食材の直売。

10) 「ヒルクライム」の聖地，湘南平

ヒルクライムの大会。自転車貸出の体験会。飲料の無料配布。

まとめ：現在、まちづくりにおいて「定住人口」と「交流人口」が重要であると言われていたが、真に大切なのは、その地に憧れて興味を持つ「関係人口」を増やすことです。観光として、一過性に終わる来街層を増やすよりも、平塚市に憧れて興味を持つ人々を生み出していくことが、将来の基盤を作ることであると考えます。

■提言③ 「湘南平バラ園計画」

提 案：東海大学現代教養センター プロジェクト実践Ⅱ履修3名（指導：成川忠之教授）

内 容：湘南平の新しい魅力づくりとして、必要な要素を検討した結果、新名所として、バラ園を計画する提案をします。バラ園は湘南ローズテラス（SRT）とし、眺望の良い公園をイメージさせる名称とします。バラ園を計画する理由としては、平塚市はバラの生産量が県内でもトップクラスであり、デートスポットとして来客数を増やすことが見込めるためです。

施 策：1）バラ園

バラ園は、バラを円形状に配置し、岐阜県可児市の花フェスタ記念公園のような配置とする。

2）人工芝

電波塔の前の砂利部分に人工芝を敷き詰め、緑化を進める。

3）交通手段

交通手段として、ラッピングタクシーを提案する。2種類のデザインとして、湘南平と星空、バラと赤い糸を製作する。

4）情報発信

湘南平の別名である高麗山公園から名前をとった「こまひめ」というキャラクターを製作。山を連想させるフォームで、手をつなぎたくなる街を連想させる赤いリボンや星を星でつないでいるキャラクター。湘南平をイメージしやすいキャラクターとして、情報発信に使用する。また、平塚市が主体となり、総合情報リリースアプリを提案する。水戸市公式アプリを参考とし、旅行者が情報を検索しやすいものとします。旅行者だけでなく、市民のコミュニティツールとしても利用が期待できます。

5）イベント

イベントとして、灯籠飛ばしやレストラン Flat と連携したグルメイベントを開催し、訪れたい場所にします。

まとめ：平塚市の魅力を伝えるイベントを開催するためには、労力と時間を使います。そのため、湘南平でのイベントを東海大学で考える機会を作れればと思います。東海大学チャレンジセンターの支援のもと、学生が自由な発想で企画・立案することで、盛り上がるイベントの提案ができるのではないのでしょうか。また、東海大学の必修科目の授業で、平塚市のイベントを考える機会を作ることができれば、多くの学生が関わることができると思います。湘南平の良さを知ってもらうため、バラ園、公

園設備、交通手段、情報発信、イベントの開催を進めることで、平塚市への来街数増加を見込めると考えます。

4) プロジェクトの成果

『市民と語ろう！ ほっとミーティング』は、前述したように「学生たちの声を政治に反映させていきたい」との落合市長の思いを実現するため、平塚市市民情報・相談課から東海大学に依頼があり発生したプロジェクトであり、依頼主である落合市長にとって学生たち若者の柔らかなアイデアや考え方は、今後の平塚市のまちづくりを進める上で有益で刺激的な提言になったと思われる。しかしそれ以上に、東海大学がめざすシティズンシップ教育のプログラムに適した取り組みであり、本学にとって価値ある成果につながったと感じている。

シティズンシップ教育を実践していく上で必要なことは、学生にとって身近に感じる地域の題材である。今回は湘南校舎周辺の自治体である平塚市の地域課題であり、落合市長をはじめ様々な部署の平塚市職員の方々に来校いただき、時間をかけて市の実状についてレクチャーいただいたことは学生たちにとって興味を誘発するきっかけにつながった。またその地域課題に取り組む広告業界の専門家に話を聞いたことも重要な機会となった。そして学生たちそれぞれが自らアイデアを出し、市長の前でプレゼンテーションする機会は貴重な経験であり、モチベーションを喚起しながら自分事として取り組む機会につながった。これら一連のプログラムは、受け身に陥りやすい一般的な授業と異なるアクティブラーニング型の授業スタイルであり、授業課題は学生を一人の市民として見なす上で成立するテーマであった。

5. おわりに

2017年度に9年目を迎えたSOHUMプログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、新たな課題を取り込みながら成長してきた実践型教育プログラムであり、その成長過程においては本学が2013年度から2017年度にかけて行った5年間の地域連携活動『To-Collabo プログラム』と歩調を合わせ発展できたと考えている。

本学にとって、また教養学部にとって本プロジェクトは、学生たちの教育を考える上でフィット感のある取り組みであり、今後さらに求められる学生一人ひとりのシティズンシップを育てる教育プログラムとなり得る価値を秘めている。SOHUMプログラムやTo-Collaboプログラムを通じてあらためて確認できたことは、「地域連携」の「地域」とは“営み”“仕組み”“多様な人”が介在する「社会」そのものであり、ダイバーシティ（多様性）を認めながら共生しようとする一人の市民を育てる教育プログラムになり得るということであった。



図22 学生から落合市長への提言風景②



図23 学生から落合市長への提言風景③